Osaka University Knowledge Archive

Title	84年大統領選挙におけるマリオ・クオモの演説 : 政治家の信仰と職責
Author(s)	池端, 祐一朗
Citation	共生学ジャーナル. 2022, 6, p. 106-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86428
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論文

84 年大統領選挙におけるマリオ・クオモの演説

―政治家の信仰と職責―

池端 祐一朗*

A Speech of Mario Cuomo at the University of Notre Dame

A Politician's Personal Faith and Official Obligation

IKEHATA Yuichiro

論文要旨

本稿は、1984 年に、ニューヨーク州知事のマリオ・クオモがノートルダム大学で実施した演説について、そのあらましを明らかにしたものである。カトリックの政治家であるマリオ・クオモが、カトリックの大学であるノートルダム大学で、個人としては中絶に反対だが、政策としてそれを強要することは出来ないという演説をした。その当時、プロライフ政策を推進しようとしていたレーガン政権（共和党）に対抗して、民主党は、84 年の大統領選挙で女性初の副大統領候補でカトリック信徒のジラルディン・フェラーロを擁立しており、この演説は彼女を支援するためだと言われている。この演説は、騒動を引き起こし、現在に至るまで米国政治と社会に影響を及ぼしている。本邦では全く知られてこなかったこの演説について、どのような演説だったのかを明らかにする。

キーワード　マリオ・クオモ、大統領選挙、中絶、カトリック、公共道徳

Abstract

This study provides an overview of the 1984 speech by Governor Mario Cuomo, a Catholic politician, at the University of Notre Dame, a catholic university. In his speech, Cuomo said that although he opposed abortion, he could not force his views through a policy. Around the same time, and in opposition to the Reagan administration (Republican Party) that was promoting pro-life policies, the Democratic Party selected Geraldine Ferraro, a Catholic, as the first female vice-presidential candidate for the 1984 presidential election. Cuomo's speech was considered to have been in support of her candidature. This speech became a hot topic then and continues to influence U.S. politics and society today. This study analyzes the speech, an area unexplored in previous studies in Japan.

Keywords: Mario Cuomo, Presidential Election, Abortion, Catholic, Public Morality

*大阪大学大学院　人間科学研究科　博士後期課程；u402251f@ecs.osaka-u.ac.jp

はじめに

2021 年 5 月 22 日、米国の『フォックス・ニュース』*Fox News* は「二人目のカトリック大統領バイデン、彼の中絶政策への反発を受けノートルダム大学卒業式をスキップ」という見出しのニュースを報じた。大統領が選択的中絶を容認するプロチョイスの立場をとるために、大学構成員 4300 人が翌 23 日の式典に大統領を招待しないよう求める署名を学長のジョン・ジェンキンス John Jenkins 師に提出していた。このニュースでは、併せて、歴代大統領が卒業式に招待されていること、バイデン大統領はスケジュールが合わないために出席しないこと、大学広報は大統領を招待したかどうかコメントしていないことも報じられた(1)。

ジョセフ・バイデン Joseph Biden 大統領（在任 2021 年 1 月 20 日～）は、中絶に反対する教えを説くカトリックの信徒でありながら、プロチョイスの立場をとっている。このことは、彼が上院議員であった頃から知られていた。そのため、カトリックの大学の構成員がこれを拒否し、もしかしたらこれを受けて大統領は出席しなかった／招待されなかったのかもしれないという印象を与えるニュースであった。

同じくカトリック信徒で、中絶とノートルダム大学の関連する話題で大きく報じられた政治家として、元ニューヨーク州知事のマリオ・クオモ Mario Cuomo（在任 1983 年 1 月 1 日～1994 年 12 月 31 日）がいる。彼は、大統領選挙戦中の 1984 年 9 月 13 日に同大学で、個人的には中絶に反対だが政治家としてそれを法制化して強要することはできないという趣旨の演説をした。次回（1988 年）以降の大統領選挙で大統領候補になる可能性が高いと目されていた有力政治家の一人で、カトリック信徒でもある彼が、カトリックの大学で、カトリックの教説に反するような演説をしたことで、その演説は大きな話題となった。加えて、その演説は、当時同じく民主党に所属するニューヨーク出身のカトリック信徒の政治家で、女性初の副大統領候補でもあったジラルディン・フェラーロ Geraldine Ferraro を支持するものであったとされている。さらに、この演説は選挙後も様々な場面で論点となり、バイデンを含む多数の政治家を後押ししてきたとも言われている。

冷戦中で、欧州連合がまだできてなかった当時、当然、欧州の国境の自由

往来すらなかった。その時代にあって、ニューヨークは、世界で最も多様な人々が集まり、多文化化・多元化の最も進んだ社会であった。そのため、当時のニューヨークは、宗教、人種、貧困、ジェンダー、教育等、様々な社会問題が世界で最も顕著に表出していた地域と見ることができるだろう。まさに、そうした問題に取り組む行政の責任者が当時のクオモである。冷戦後、往来がより活発になると、同様の問題が世界各所で起こるようになる。こうした場所では、クオモのような考え方とそれに対する批判は、現実に生起し得るものとなっている。

本稿の目的は、クオモがこのような問題に対して、どのような問題意識をもって、どのように取り組もうとしていたのかを明らかにすることにある。そうすることで、現在、生起している様々なコンフリクトの検討の一助となるであろう。

そのために、我が国で全くと言っていいほど知られていないこのクオモの演説が、どのようなものであったかを見ることで、米国政治におけるこの演説の位置づけを確認していく。まず演説までの米国社会での出来事を見ることで、その背景を確認し（第 1 章）、その上で、演説の内容（第 2 章）、その後の反響（第 3 章）を確認する。さらに、実際にクオモへの批判とその批判にクオモがどのように考えているのかを確認（第 4 章）することで、よりクオモの演説への理解を深めていく。

1　演説の社会背景

演説の内容について見ていく前に、まず、クオモがその演説をするに至った社会背景を確認してみよう。

1973 年のロウ対ウェイド判決により、連邦最高裁が中絶を合法とする判決を下したことが、一般に、米国の中絶政策の転機とされる(2)。

ロバート・N・カーラーRobert N. Karrer によると、ロウ判決後の 1970 年代中頃になると、プロテスタントの保守的な人たちは、より宗教的、社会的、政治的に目立つようになってきたという。1976 年には、ジェームス・カーターJames Carter（民主党、在任 1977 年 1 月 20 日～1981 年 1 月 20 日）が当選し、「福音派の年」とされ、「ボーン・アゲイン」は彼の当選を喜んだ。た

が、カーターは大統領在任中、中絶、同性愛、ポルノグラフィを含む社会問題の多くで、福音派と原理主義的な人たちを怒らせていたと、カーラーは述べる(3)。歴史上、カトリック信徒は、民主党と密接に提携しており、1980 年代初期の米国の司教らの公共政策の覚書はもっと民主党と密接だったという(4)。

1980 年代には、平和及び核軍縮の促進、貧困、生まれていない人間の保護を含む社会問題で、リベラルと保守の連合を助けていた司教もいた。カーラーによると、そうした司教たちのカトリックの社会的教えを反映した行動は、中絶を重大な道徳上の論点として扱うことを模索していたプロチョイスのカトリック政治家に、政治的な口実を提供した。さらに、福音主義的なプロテスタントとの協調に亀裂を生じさせることで、プロライフ運動の中に左派を創り出したとも、カーラーはしている(5)。1980 年には、共和党は中絶の権利を変更しようとし、議会で阻まれても、中絶を違法にするのを諦めなかったと、カーラーは指摘する(6)。さらに、1981 年に大統領に就任したロナルド・レーガン Ronald Reagan（共和党、在任 1981 年 1 月 21 日～1989 年 1 月 20 日）は中絶に反対する政策を一貫して推し進めようと試みていた。

そうした中で行なわれた 1984 年の大統領選挙において、二期目を狙うレーガン政権に対抗する候補として、民主党は、大統領候補にレーガンの前のカーター政権で副大統領だったウォルター・モンデール Walter Mondale を、副大統領候補にニューヨーク州選出のカトリック女性の下院議員でプロチョイスの立場をとるフェラーロを選出したのである。「女性初」の副大統領候補フェラーロの選出は、一つの目玉であり、実際に注目を集めることになる。

1984 年 4 月、レーガンは、中絶に否定的な立場を記した著書を出版し(7)、6 月にはニュージャージー州のカトリック教会で行なわれた祝祭で「我々は生命のためにあり、中絶に反対する」と述べたりしている(8)。

1984 年 1 月 31 日にニューヨーク大司教に任命されたばかりのジョン・オコナーJohn O’Connor 枢機卿は、6 月に「良心に照らして、カトリック信徒がどうしたら中絶に賛同するような……投票をするのか、私にはわからない」と発言している(9)。

こうした状況で、1984 年 8 月 3 日の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、（中絶に賛同する候補者に）「カトリック信徒でない人は投票することがで

きると述べているニューヨーク大司教が、今や我々にはいる」とクオモが述べたことを伝えた。さらに同紙は、クオモが、「レーガンは宗教を武器として、道具として積極的に使用していた」と述べ、オコナー枢機卿だけでなくレーガンも非難したことも伝えている(10)。こうした発言により、クオモは、オコナー枢機卿からだけでなく、米国のカトリックを取り仕切る全米カトリック司教協議会 National Conference of Catholic Bishops、さらにはプロライフ政策を支持する人々からも非難される(11)。すでに確認したように、共和党の候補者でもあるレーガン大統領は、「生命のためにある」と述べるなどしており、民主党のクオモのこの発言が有権者に対照的に映ったことは、容易に想像できる。

1984 年の大統領選挙戦について、「何よりもまずその緊急リトマステストのために、社会問題で民主党と意見を異にする「レーガン民主党員」の大多数を含む多くのカトリック信徒が、民主党から離反した」とカーラーは述べる(12)。

司教協議会は、1967 年に全米生存権委員会 National Right to Life Committee を創設、中絶のリベラル化をやめさせるために多くのカトリック指導者たちが 1967 年から 1972 年にかけて、州のヒアリングで証言をしていた。ロウ判決の翌年の 1974 年には、人命条項修正のための全米委員会 National Committee for a Human Life Amendment を設立し、さらに翌 1975 年にはプロライフ運動への参加のガイドとして「プロライフ活動のための霊的計画」と題した書簡を出すなどしていた。司教たちは中絶をその時代の中心的な道徳上の論点の中の一つとして見ていたと、カーラーは述べる(13)。

つまり、特に 1973 年のロウ判決で最高裁が中絶を合法とする判決を出していたにもかかわらず、84 年当時はレーガン政権がプロライフ政策を推進しようとしていたのである。そのようなところに、対抗する民主党はプロチョイスで女性初の副大統領候補を出してきたのである。加えて、その女性副大統領候補が、プロライフの教えを説くカトリック信徒でありながら、教説と異なる立場をとっていたことから注目を集めた。その結果、中絶が一つの争点となっていたと見ることが出来るだろう。

クオモの演説は、こうした背景を受けて行なわれることになる。

２　演説の内容

クオモは、1984 年 9 月 13 日にニューヨーク州知事としてノートルダム大学に招かれ、「宗教の信条と公共道徳——いちカトリック知事のパースペクティブ」と題した演説を実施した。その演説の中で、クオモは、神学者や哲学者やその他の立場ではなく、「法律家としてのトレーニングと政治家としての実践によって、今の私があります」(14)と自身の立場を述べる。その演説全般を通じて、クオモは、個人的には中絶に反対であるが、ニューヨーク州知事として、それを制度化し、人々に強要することにも反対であるということを示した(15)。

当時、クオモの地元の『ニューヨーク・タイムズ』紙はもちろん、他の多数のメディアでもこのクオモの演説は報じられている。特に注目されたのが、米国は宗教の影響を受けながらも教会の教えとは違った公共道徳を創造すると述べたことであった。クオモは、コンセンサスを通して公共道徳を造り上げると宣言している。クオモの考えでは、大抵の米国人は公共生活の一部としていくらかの宗教上の価値を受け入れており、既成の教会なしでも、民主主義国家である米国は宗教を巻き込んでいる。米国人の大多数によって、コンセンサスにいくらかの宗教上の価値が反映される。だが米国の人民は大きな宗教組織と距離をとるために、政策の方向性に教会の教えがないことが重要となってくる。クオモは、そうした中でのコンセンサスを通して、公共道徳は作りあげられていくと述べた(16)。

この演説の内容をさらに詳しく見ていくことにしよう。

クオモは、演説の最初の方で「米国において政治と宗教は、我々の忠誠心を分けなければならないのでしょうか？」と述べ、さらに、もし分けるなら、それは完全に分かれるのか、分かれないなら、それは存在すべきかと問うてから、本題に入る(17)。

1984 年の夏に、ニューヨーク州のカトリック共同体内で、中絶問題での政治上の立場で混乱があったとクオモは述べる。その混乱によって起こった対話によって問題が明確化したのだという。

> 混乱は明確化の機会を提供し、我々はそれをつかみ取りました。今や我々全員が、異口同音に、司教協議会は「政治の候補者に賛成か反対の立場をとる」

> ことはないであろうという、そして、特定の論点での彼らの立ち位置が「政治への加担の説明として」受け取られるべきでないという全米カトリック司教協議会の声明を、何度も繰り返し言っています(18)。

加えて、カトリックの高位聖職者たちが、信徒たちから受ける「偉大な尊敬」を利用しようとすれば、全員がそうできたはずだが、一部がそうしているに過ぎないと、クオモは述べる。高位聖職者と政治家が密接に結びついているのは、それが賢明であるとする司教たちとほとんどの一般信徒の判断のためであるといい、「このコンセンサスを得たことは並外れて有用な成果だった」と彼は述べている(19)。

すでに述べているように彼は、中絶に関して、彼の個人的な信条（プロライフ）と政治家としての政策立案（プロチョイス）では立場を分けている。そのため、この賢明な判断によるコンセンサスが、彼にとって極めて重要となる。

続いて彼は、米国内の一般信徒の暮らしについて論じていく。信仰を受け入れるためには、「信じるためにも実践するためにも、経験の中で真実を明らかにするために、それをもっと理解しようと、そしてよりそれに忠実に生きようと、生涯もがくことを必要」とするが、20 世紀後半の米国は消費社会であり、信仰は頻繁に退けられるという。さらに、多元的民主主義の中で、他の宗教を信仰する人や無宗教者たちのためにも尽くすために選挙で選出され、「特別な責任」を任され、「最高の尊厳とともに、そして適度な自由とともに、**みんな**が生きられる状況を作る手助けを引き受け」る(20)。

> 彼または彼女は、最高の尊厳とともに、そして、適度な自由とともに**みんな**が生きられる状況を作る手助けを引き受けます。その状況は、当選者全員が特にカトリックの人たちとは異なる信条を持っているかもしれないのであり、時にはカトリックの人たちを否定するかもしれないのです。さらに、その状況は、人々の離婚の権利、バースコントロールを用いる権利、そして中絶の選択権さえも、法律が保護するものです。
>
> 実際、カトリックの公職者は、この自由を保証する体制を維持する誓約をしています。そして、彼らはとてもうれしそうに誓約をしています。他者が彼らの自由とともにする何かを彼らが愛するからではなく、すべての人にとっての自由を保証する中で何をするかをよくわかっているために、**我々の**カトリック

でいるための権利を彼らは保証します。祈るための、秘跡を使うための、バースコントロールの仕組みを断るための、中絶を拒否するための**我々の**権利であり、我々が離婚と再婚を悪いことだと信じていているにもかかわらず、離婚と再婚をする権利ではありません(21)。

米国史のほとんどで、そうした生活を大抵のカトリック信徒が受け入れてきたという真実、カトリック信徒が自分たちの自由を保証するために、他者にも同じ自由を認めなければならないという真実があると、クオモは指摘する。そして彼は、以下のように強調して述べている。

私は、ユダヤ人やプロテスタントや無信仰者、あるいはあなたの選んだ何者かとして、あなた方の信仰の権利を維持することで、私のカトリックでいるための権利を守ります。

他者に我々の信仰の強制しようと模索することの代償は、他者がいつか我々に彼らの信仰を強制するかもしれないということだと、我々は知っています。

この自由は、行政における我々独自の試みの基盤となるだけの強さがあります。我々の法と政策の策定に至る強制と思索の複雑な相互作用において、その維持は広範かつ支配的な関心事でなければなりません(22)。

クオモは、彼の提案が、彼のためだけではなく、カトリックではない人々を含む彼の「仲間の市民」を納得させるための政治の過程を利用するという。（クオモはそう考えてもいないために、実際には実施しなかったが）もし全てのコミュニティのためになると考えるなら、避妊具の使用への公費支出に反対する法や中絶に反対する法を要求すると述べ、そうする自由はあると、クオモは述べる。さらに、彼は、いちカトリック信徒として救済の使命があり、司教たちの教導に敬意を抱いているともいう(23)。

だが、クオモは、米国の人民が多くの事柄で異なる信条を持っていると指摘する。

大抵、すべての米国人は、我々の公共生活の一部としていくらかの宗教上の価値を受け入れます。我々の多くが抑圧や抑制から自由な彼らの宗教の信仰生活をおくるためにわざわざここに来た祖先に由来しており、我々はいち敬虔な人民です。しかし、我々は同様に多くの宗教のいち人民でもあります。その人民は、既成の教会によることなく、多くの事柄で異なる信条を持ちます(24)。

米国人の公共道徳は、正しさと悪のコンセンサスのとれた観点に依拠し、宗教信条から引き出された諸価値が多元主義コミュニティに共有されることなしに、公共道徳になることはないと、彼はいう。さらには、このコンセンサスを通じて、米国の公共道徳を米国人が創造するのだとしている。

人民は、形式的な宗教と政府の間でもつれている関係を怖がっており、憲法と宗教の教説から離れ、神のための話をし、他の神や立場を否定するような主張を間違いだとみなす感覚があると、クオモはいう。そのため、政治パンフレットにそうしたものがあるなら、人民のほとんどが攻撃されているとも、彼は述べている。

さらに、今日の公共道徳の問いには多くの生と死の問題があり、ほとんどが宗教に関連した問いでもあると、クオモはいう(25)。その上で、彼は、カトリック信徒としての立場と知事としての立場について以下のように述べている。

> いちカトリックとして、私は、私自身と私の家族にとって正しい人として、確かな回答を受け入れており、そして私がそうであったために、マチルダの夫として、5 人の子供の父親として、父親の臨終に立ち合い、管と針が延命の目的を果たさないために決断を試みた息子として、それらは特別な道の中で影響を及ぼしていました。
>
> しかしながら、そうした生と死の同じ領域において、**他の**人民の権利を決定するための政治上の意味の明確化作業に、知事として私は巻き込まれます。中絶はそれらの論点の一つです。そして、中絶は、数ある論点の中の一つであり続ける限り、最も論争の余地のあるものの一つであり、カトリックのいち公職者としての特別な道中にいる私に影響を与えます。
>
> ……宗教上の価値と公共政策の相互作用へのカトリック教会の敬意ある行動は、我々の**政治**運営がどうあるべきかを決定するのに融通の利かない道徳原則などないと、私がはっきりさせることによって始めるべきだと、私は信じます(26)。

クオモは、離婚とバースコントロールでは道徳上の教えなしに、教会法が市民法を遵守するが、中絶では違うという見解を示す(27)。教会と彼の良心は、離婚、バースコントロール、そして中絶について反対する「疑いのないこと」を信じるよう要求し、いちカトリックとして彼はそれを受け入れるという

(28)。だが、事実として公共道徳においては、中絶の禁止を肯定するようなコンセンサスはないことを、以下のように示唆する。

> **中絶が政府の失敗ではないというのは、つらい真実です。中絶をするよう強制する省庁はありませんが、中絶は進行していきます。**カトリック信徒は、統計上、人口のその他の人々と同じ割合で中絶の権利を支持しています(29)。

さらに、以下のようにも指摘する。

> **中絶の法的制限の是非が、カトリックの忠誠の排他的なリトマステストであるべきではありません。我々の仕事がかろうじて始めていたのは、中絶が法の保護を奪われるか否かだということを、我々は理解すべきです。その仕事は、誕生の瞬間に生存権が終わることのない社会、幼児が特性を養われ、きちんと収容され、十分に教育される限り、過剰に干渉しない社会、目の見えない子供や発達障害の子供が生きる権限を与えられるよりも存在を非難されない社会を創造する仕事です(30)。**

こうして、クオモは、個人としてはカトリック信徒として中絶に反対であるが、それを知事としての権限をもって法制化し、州の人民に強要するのは反対であり、それは自身の信仰に反していないとした。

３　演説後の社会の反響

次に、クオモの演説（9 月 13 日）への反響や関連する事象について、主だったものを投票日（11 月 6 日）までに限定して確認してみよう。

クオモの演説は、演説から 2 日後の 9 月 15 日の『ニューヨーク・タイムズ』紙で「みごと」で「思慮深い」とされた。さらに、同紙は、社説で、中絶の規制について、ある宗教の信条を他者に強制するために法を用いるべきではないとした(31)。

しかし、司教協議会の外郭団体の合衆国カトリック協議会 United States Catholic Conference のリチャード・デフリンガーRichard Doerflinger は、教会は中絶を悪だとするだけではなく、さらに、合法的中絶の容認は人間の生命の否定であるという教えを不公正であり、公共善への脅威であると指摘す

る。加えて、彼は「教会の教えのレベルで、これは、公的部門に直接適用できる道徳原則の一つである」と述べた(32)。

カトリック信徒で哲学者のマイケル・ノヴァク Michael Novak は、カトリックのプロライフ政治家たちが現在の一般法を是認するが、「彼らは中絶支持団体から資金を奪ったり、そうした団体に補助を与えたり、そうした団体に彼らの名前とリーダーシップを貸したりしなければならないのではない」と述べる(33)。

その他にも多数の人物がクオモの演説に言及している。10 月 15 日には、オコナー枢機卿がこの演説を念頭に、中絶と政治について講演で話し、「あなたの個人的な信条は私にとって論点ではないし、あなたの政治も論点ではない」と述べている(34)。

クオモの演説の一方で、10 月 4 日に『ニューヨーク・タイムズ』紙に「中絶を評価する意見の多様性は献身的なカトリック信者の中に存在する」と題した見開きページの広告が話題となる。この広告は、（ノートルダム大学の関係者も含む）96 名と 1 団体の署名がある「多元性と中絶についてのカトリックの声明」を掲載している(35)。この広告は、プロチョイス団体の自由な選択を支持するカトリック信徒 Catholics For a Free Choice（CFFC）が中心となり作成したものである。フェラーロが、司教たちに批判されていたために、CFFC がフェラーロの支持を目的として掲載した(36)。フェラーロ自身下院議員であった 1982 年、多元社会における中絶の合法性についての声明として CFFC が出した公開状に署名するなど、関係の深い団体である(37)。

このように、中絶に関する論争は、1984 年の大統領選挙において、どんどん大きくなっていった。

カーラーの見解では、クオモの演説が、中絶での新しい「リベラルの正説」の形成を助けたという。さらに、カーラーは、バイデン（民主党）、フェラーロ（民主党）の他にも、当時上院議員だったエドワード・ケネディ Edward Kennedy（民主党）、ダニエル・パトリック・モイニハン Daniel Patrick Moynihan（民主党）などのプロチョイスのカトリック政治家を連れ立って、「個人的には反対」の立場も促進したとも述べて、クオモを批判している(38)。

このように、クオモの演説は、プロライフ政策をとるべきだと考える人々から多くの批判を受けた。一方で、公共政策として中絶を禁止することに反対する考えを示したことで、プロチョイスのみならず、プロライフの人々の

中からも賛同する人がいた。このように、自身の信教と公共政策について異なる考えをしている人々からも支持をされていたのである。

これまで、演説を巡る社会的な動きを見てきたが、次にこの演説への批判にクオモがどのように応えているのかを確認してみよう。

4　演説への反論とそれに対するクオモの応答

この演説は多方面から注目をされ、論じられている。その中でも、2004 年 9 月のカトリック誌『公共福祉』*Commonweal* は、クオモへの批判論稿、そしてそのすぐ後にクオモ自身による応答論稿を掲載しており、特に注目に値する。この二つの論稿は、クオモやこの演説がプロライフの立場からどのように見られ、クオモ自身はどのように考えているのかということの概要を知ることができる。クオモの演説をより理解する助けとなるだろう。

まず、クオモを批判する論稿から確認していこう。『ニューズウィーク』誌 *Newsweek* の編集者であったケネス・ウッドワード Kenneth Woodward が、クオモのこの演説とその後の米国政治への影響について論じている。彼は、この論稿を以下のように始め、クオモの演説への否定的な立場を示している。

> 民主党の大統領候補に指名されたジョン・ケリーJohn Kerry が中絶についての彼の立場を話すのを聞いていた時、……私は、背後に、『ボストン・グローブ』紙が最近「哲学政治家 philosopher-politician」と冠したマリオ・クオモの堂々とした声を聴いた。
>
> それは、彼がノートルダムで届けた、何がプロチョイスのカトリック政治家のために設定された理論的根拠になるのかを彼が定義した、彼の有名な演説である。最近の『ニューヨーク・タイムズ』紙のケリーとカトリック司教たちについての見開きページにおいて、私は「古代の詭弁」の一部のような演説だと退けた(39)。

この期間中、ウッドワードは、クオモのこの声明について何度も見返し、クオモと電話で討議したという。

ウッドワードも、クオモの演説を彼自身のプロチョイスの立場を守るだ

けでなく、ニューヨーク出身のカトリック女性でもある民主党副大統領候補のフェラーロのためでもあったという見解である。さらに、ここしばらくの米国のカトリシズムのハイライトにもなったという。

ウッドワードは、オコナー枢機卿が、ニューヨークのローカルテレビ番組で、良心に照らしてカトリック信徒が中絶の権利をどうしたら支持できるのかわからないと述べたことを引き合いに出した上で、クオモが知事として中絶を禁止するのに反対だとした理由を二つ列挙した。一つ目は、中絶でのカトリック教会の教えに同意しないカトリック信徒と非カトリック信徒をそのような法が拘束してしまい、それによって彼らの信教の自由を侵害してしまうということ、二つ目は、反中絶立法の中に公的なコンセンサスがないということである。「ここのポイントは、クオモが何を言わ**なかった**のか、同様に、何を言ったのかには価値がないということである」とウッドワードは述べる。ウッドワードの見解では、クオモが、中絶が悪であるとか、公共道徳の事柄として生まれていない人間の権利を守るとか、中絶論争が社会正義の射程をめぐって不一致であるとは言わないのは、それらを真実だと信じていなかったためである(40)。

クオモが演説したときでも、大抵の米国人は中絶をする権利を支持するけれども、過半数以上の人が中絶はレイプや近親強姦や母親の差し迫った身体的危険に制限されるべきだと信じており、1990 年代中頃、プロライフの女性の数はプロチョイスの女性に匹敵し始めていたと、ウッドワードはいう(41)。

つまり、少なくとも、中絶をする権利自体は 1984 年当時すでに支持されており、個人の認める中絶への意識のようなものが時代とともに少しずつ変わっていったということになるのだろう。

「クオモは政治的表現において、この新興の道徳的コンセンサスを涵養してきたのかもしれない」(42)。1988 年には中絶に反対ではない「マイルドな」内容の声明を承認し、1992 年のクリントンの登場する党大会で、クオモは、中絶に反対する共和党を非難したと、ウッドワードは指摘する。さらに、その後の大統領選挙においても、クオモ自身、そして 1984 年に提示した中絶に関する姿勢が重要な地位と役割を果たしていたことを示し、「哲学的、政治的、さらに生物学的な根拠を推進しながら、そのカトリックの論は広がっていく」とウッドワードは述べている(43)。

最後に、ウッドワードは、クオモが成長中の胎児は本当の人間であるとは認めないし、クオモの言う人間の「家族」は産まれていない人を含むほど充分広くはないし、カトリック信徒はクオモの論を拒絶する全ての理由を持っていると述べ、このクオモを批判する論稿を終えている(44)。

次にこの論稿に対するクオモの見解を確認していこう。

すでに記したように、クオモの論稿は、ウッドワードの論稿のすぐ後に掲載されている。その論稿の中で、ウッドワードが、ノートルダム大学での演説を聞いたときにその演説に挑戦しようと決意していたこと、2004 年の大統領選挙の民主党のケリー候補がクオモのその演説の影響を受けていたと述べていることを、クオモはまず指摘している。その上で、ウッドワードが 1984 年以降のクオモの人生についてよく調べ、「政治的度胸」がクオモに欠けていたこと、「詭弁」の罪がクオモにはあることを発見したと、クオモは指摘する。そのため、クオモは、配慮が不十分のまま発言したのを後悔しているという(45)。

> 「全ての宗教上の罪が法律上の罪にされるべきだと述べる馬鹿げた立場」だと我々に述べたジョン・コートニー・マリーJohn Courtney Murray のような偉大な米国の神学者たちの教えで、私の演説は繰り返された。マリーらの立場は、市民法が美徳に全ての人を導くことに関することであるにもかかわらず、とても打算的であるというアクィナスの報告と一致していた(46)。

そうした立場が、中絶についてのクオモの演説への対応に関連しているように思うと、クオモは述べている。そして、ウッドワードの多正面攻撃を判定するためには、クオモの演説を読み直すべきであると述べる。

ウッドワードの論稿は、胎児が受精の瞬間から人間存在であるという主張を、確信をもってするときに最高潮に達し、現代の教会の教えのために、科学的根拠に依らないで結論を出していると、クオモは論じている。その上で、もし米国の人民が（あるいはカトリックの人民だけでも）受精の瞬間から人間の生命であるとするなら、1984 年の演説はなかったと、彼は述べている。さらには、米国の人民（あるいはカトリックの人民）が憲法を支持するのを見出すのは、容易であるとも述べている。

その上で、「私の演説は宗教の論文ではない」とし、もし宗教の論文であれば、教会の不可謬な教えを拒まないと、クオモは述べている。1869 年に

教皇ピウス 9 世が受精の瞬間に魂が入るとカトリック教会として初めて述べ、アクィナスは 40 日後まで入魂は起こらないだろうと考えていたし、アウグスティヌスは胎児がいつ人間になるのかわからないと告白していることを、クオモは指摘する。さらには、教会が中絶された胎児を天国に送るために洗礼と埋葬を要求しないことに疑問を呈す(47)。加えて、中絶をしないと死んでしまう場合でも、女性に中絶の権利を否定すべきだとする事例を、政治家が人民に提供するべきなのか、ウッドワードと彼の追従者がそう信じているのかとも問う。

> 私は哲学者や神学者ではなく、あるいは、いつ人間存在の生が始まるかについての確かな結論に私一人で達し得る才気あふれる執筆家でさえもない。私は、必死に私の教会を必要とし、私のカトリシズムは純粋な知性ではなく信仰に基づくために、私の教会のルールにのっとった生活を選択する古臭いカトリックの罪人である(48)。

クオモは、母親の生命を守るための中絶すら禁止するという米国人の（カトリックの米国人に限っても）コンセンサスを打ち立てるための根拠をはっきり示すことができないと述べる。「制限のない中絶の権利」をクオモが擁護し、ロウ判決すら黙認するとウッドワードは述べるが、それは誤りだとクオモはいう。ウッドワードの「完全主義者バージョン」の中絶の立場は、米国人の数パーセントしか受け入れないとクオモは述べる(49)。

「知事として、私は意図しない妊娠を減らすことで中絶を削減するプログラムのシリーズを頑強に擁護した」(50)。そのプログラムは、意図しない妊娠をした貧しい女性に、その子供の適切な里親を見つけることで安心させもしたが、ウッドワードはこれを知っていたにもかかわらず言及を怠ったと、クオモは批判する。

「我々の法」は、大統領の宗教信仰によってではなく、知性、知恵、歴史、哲学、科学、その共同体の思慮ある人々に共有された自然理性に基づくべきであるとクオモは述べる(51)。

> 信条ひいては狭義の宗派に基づかないばかりか、さらには、秩序、平和、正義、思いやり、愛といった特定の宗教の起源から離れてもなお我々が大抵望む価値への人間の願望も満たさないために、他者を巡る一つの宗教の公式な選好

を禁じる第一修正が、同様に、我々の普遍的な公共道徳の論文として十分に役割を果たすだろうと宗教信条に論じる権利を肯定するということを、私の演説は指摘する。いつでも宗教の公職者に疑問を呈す機会になるということを、私は演説に込めた(52)。

クオモは、彼の人生において、カトリックによる束縛を受け入れることを必要とするが、それを全ニューヨーカーに課すための模索は必要ではないとする。さらに、カトリックの宗教的価値は「大きな多元主義的共同体によって共有されることはない公共道徳の一部」だと理解しているともいう。

その共同体のコンセンサスに達する妥当性は、努力するかしないかを決定する中での妥当な思慮である。政治的リアリズムの米国のカトリックの伝統は明確に存在する。市民法にカトリックの原則を差し込もうとするその企てへの尊敬とともに、教会は思慮深い実践的判断を常にする。19 世紀に奴隷制度があったという真実があり、今日色々な厳粛なカトリックの信条があるという真実がある。カトリック信徒は、何年も、公平で心地いい民主社会のそうした真実を生きてきた(53)。

ウッドワードは、クオモが何を言わなかったのかを分析することで、クオモが信じる真実を見抜こうとした。しかし、ウッドワードは「人権」と「社会正義」を見落としていると、クオモは述べる。そして、「なぜケンと教会は、中絶について述べるすべてを死刑では述べないのか？」と問い、これ対してウッドワードが、人間の胚は犬や猫にならないという事実のために討議に値しないと言うだろうと、クオモは述べる。こうしたカトリックの立場を説明したり、判断したりする必要への高慢な態度は、カトリックの教えが浸透した社会にいる人の態度であると、クオモは指摘する。さらに、クオモは、彼の演説が、カトリックと非カトリックの共同体から、当時よりも大幅に支持されているのは明白であると考えているとも述べる(54)。

クオモは以下のように述べて、このウッドワードへの応答を締めくくっている。

ケン・ウッドワードが一生懸命悪評をつけ、こき下ろしたその演説を拝見する機会が、もしあなたにあるなら、2～3 分あなたの時間を捻出して、以下の言葉を含む最後の数段落を読むことを私は願う。**「この世界の中に彼の真実を維持**

することで、彼の愛の具現のためにもがくことで、……、キリストが我々に与えた道徳性を生き、実践することが我々はできます。我々の心と我々の考えにおいて、生活の指針とするために他者に向けて法を制定しようとすることによってだけではなく、神によって我々のために書かれた既存の法を生きることによって。……無理にさせるのではなく、説得するのです。愛によって真実に人民を導くのです。そして相変わらず、ずっと、我々独自の多元的民主主義を尊重し、謳歌するのです。そして、政治家としてさえ、我々がそれをすることができるのです」(55)。

おわりに

本稿で見てきたように、マリオ・クオモの演説は、1984 年の大統領選挙において、ニューヨーク出身の女性初の副大統領候補のジラルディン・フェラーロを応援するためになされ、その後のプロチョイスの立場をとる政治家に対しても大きな影響を与え続けている(56)。

まだ欧州で鉄のカーテンがおりていた時代に、クオモは、多様性に富んだ社会をどのように統治するのかについて苦慮してきた。この演説は、まさにその苦慮の中から出てきた考えをまとめたものだと言える。さらに、当時のニューヨークの統治は、現在の多様な社会問題を検討する際に参考となる一つの先例である。その統治の根本的な考え方を示したものとして、本稿で取り上げた演説は特に重要な位置づけにあると言えるだろう。

学術上の検討例として、ホセ・カサノヴァ José Casanova は、『近代世界の公共宗教』において、まさにこのクオモの演説とそれに対する司教たちの批判を詳しく取り上げ、公共宗教が何であるかを探るために検討している(57)。他に、熟議民主主義を提案しているエイミー・ガットマン Amy Gutman とデニス・トンプソン Dennis Thompson が、彼らの論稿「道徳的コンフリクトと政治的コンセンサス」において、寛容における寛大の一形態を例示するためにクオモの演説を取り上げ、演説の内容を検討したりもしている(58)。他にも、このクオモの演説とそれを巡る論争は、中絶や信仰の問題に収まらないより広がりのある論点で論じられている。

それにもかかわらず、日本では、この演説はほとんど知られていない。そ

のために、様々な場面での事態の理解が不十分なときがあるように思われる。21 世紀になってからも、例えば哲学者の加藤尚武は、檜垣立哉との往復書簡でバイオエシックスにおけるピエール・ベールの「寛容論」について言及し、次のように述べている。

> 「寛容論」を否定する人々と、私はひそかに闘っている。彼らは自分のホンネを示さない。彼らの振るまいが、「寛容論」を否定する人であることを示している。カトリックの人々も、もしかしたらピエール・ベールの「寛容論」を、今でも否定しているのではないかと、私は疑っている(59)。

さらに加藤は、中絶におけるこの「寛容論」について学会誌『生命倫理』で以下のように述べている。

> 世俗的な力が、宗教的な信念に反することを強制しない限りで、世俗的な支配を許容することができる。「法律的に人工妊娠中絶を許容する」ということを、人工妊娠中絶に宗教的な理由で反対する人が、支持するのは、「人工妊娠中絶の法的な自由化のもとで、自分は自分に宗教的な信念に従って、人工妊娠中絶を許さない」からである。もちろんその人は「法律的に人工妊娠中絶をすべきである」という規定は、根本的に受け入れない。しかし「人工妊娠中絶を法律的に禁止することは、宗教的な信念の強制ではない」という主張もありうるだろう(60)。

マリオ・クオモの演説はまさに「人工妊娠中絶の法的な自由化のもとで、自分は自分に宗教的な信念に従って、人工妊娠中絶を許さない」を具現化したものであるように思える。クオモの演説が、ピエール・ベールの「寛容論」に合致しているかどうかは別に検討が必要ではあるが、少なくとも、加藤の主張したい形式を取れてはいると言えるだろう。

本稿の冒頭で言及した『フォックス・ニュース』の報道は、バイデン大統領が「二人目のカトリック大統領」であることを強調し、カトリックの大学であるノートルダム大学が中絶での立場を理由に招待をしなかったかのような印象を与えるものであった。しかし、ノートルダム大学では、1984 年以降も、1992 年の大統領選戦中に、この選挙で大統領になるウィリアム・クリントン William Clinton（民主党）が(61)、2009 年には当時の大統領のバラク・オバマ Barack Obama（民主党）がそれぞれ中絶の権利を擁護する演説

をしている[62]。こうした前例があるにも関わらず、もし本当に、「女性初の副大統領」カマラ・ハリス Kamala Harris が誕生した政権の大統領を、女性の問題として議論されることも多い中絶の立場を理由に招待しないのであれば、大学にとってデメリットの方がはるかに大きいだろう。

注

(1) Biden, Second Catholic President, to skip Notre Dame Commencement after Backlash to His Abortion Policies. *Fox News*. May 22. 2021
　このニュースでは、署名をした人々が本当はどのような理由から大統領を招待しないことを求める署名をしたのか判断できない。実際は、別の理由で不支持であるかもしれないし、新型コロナ感染症を心配して、人がなるべく集まらないようにしたかったのかもしれない。同様に、この署名した人のどれだけがカトリック信徒であるのかもわからない。

(2) ロウ判決は、山崎康仕によって要約が翻訳されている（「翻訳：人工妊娠中絶をめぐる規範の形成――Roe v. Wade」山崎康仕訳、『国際文化研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』40:143-202）。

(3) Karrer（2016:108）
　カーラーは、プロライフ団体のカラマズー（ミシガン州）の生存権 Kalamazoo (MI) Right to Life の代表であり、プロライフの運動史を中心に研究している。
　カーター大統領は、中絶に反対し、福音派の支持を多く受けていたと言われることが多い。

(4) Karrer（2016:108-109）

(5) Karrer（2016:104）

(6) Karrer（2016:109）

(7) レーガンは、著書『中絶と国家の良心』の中で、黒人の自由や障害者の生きる権利を引き合いに出し、すべての人間には生まれながらにして神聖な権利があり、その権利こそが生きる権利であるとしている（Regan（1984））。

(8) non-title. *Associated Press*. August 3. 1984; Abortion foes Assail Mondale Ticket. *New York Times*. August 4. 1984
　日付は 3 日の記事、発言は 4 日の記事を参照。

(9) Novak（1984:45）
　このオコナー枢機卿の発言は、様々な記事や論稿で引き合いに出される。
　一方で別の機会に、オコナーは中絶の権利を支持するクオモ知事を破門してかまわないかと尋ねられた際には、それはないという考えも示している（Prayer and Tributes for O'Connor. *Associated Press*. May 8. 2000; A Partial List of Mourners. *New York Times*. May 8. 2000; Death of a Cardinal: The Overview; O'Connor is Buried in a Solemn Ritual Citing His Message. *New York Times*. May 9. 2000）。

(10) Cuomo to Challenge Archbishop over Criticism of Abortion Stand. *New York Times*. August 3. 1984
(11) Karrer（2016:118-119）
(12) Karrer（2016:104）
(13) Karrer（2016:110）
(14) Cuomo（1993:34）
　クオモ自身は、この演説について、様々な影響を与えていることを自覚していることをコメントに残している（Cuomo 1993:32）。
(15) Cuomo（1993:32-51）
(16) Cuomo Bids Catholics Persuade by Example, Not Impose Views. *New York Times*. September 14. 1984.
　『ニューヨーク・タイムズ』紙は同日紙でクオモのスピーチの抄録も掲載している（Excerpts from Address by Cuomo at Notre Dame. *New York Times*. September 14. 1984）。
(17) Cuomo（1993:33）
(18) Cuomo（1993:33-34）
　ここで言うニューヨークの混乱とは、恐らく、ニューヨーク州選出のカトリックの下院議員で民主党の副大統領候補のジラルディン・フェラーロがプロチョイスであることに対する、高位聖職者を含むプロライフの立場の人々からの批判のことだと思われる。
(19) Cuomo（1993:34-35）
(20) Cuomo（1993:36）強調原文
(21) Cuomo（1993:36）強調原文
(22) Cuomo（1993:36-37）強調原文
(23) Cuomo（1993:37-38）
(24) Cuomo（1993:38）
(25) Cuomo（1993:38-40）
(26) Cuomo（1993:41）強調原文
(27) Cuomo（1993:41）
(28) Cuomo（1993:41-42）
(29) Cuomo（1993:46）強調原文
(30) Cuomo（1993:49）強調原文
(31) Karrer (2016:122); A Faith to Trust. *New York Times*. September 15. 1984.
(32) Cuomo bids Catholics Persuade by Example, not impose Views. *New York Times*. September 14. 1984
(33) Novak（1984:45）
　ノヴァクは、1981 年から 82 年に国連人権委員会の米国大使を務めている。
(34) O'Connor（1985:53）
　この論稿は、1984 年 10 月 15 日にニューヨーク市の大聖堂高校 Cathedral high School（普段オコナー枢機卿がいる聖パトリック大聖堂から約 1 マイルの場所にあるカトリックの女子高）でオコナーが実施した講演の原稿である。
　掲載されている『人命評論』*Human Life Review* は 1975 年創刊のプロライフの雑誌である。ノートルダム大学でのクオモの演説から約一年後のこの号で

は、10 周年記念号とされ、このオコナーの講演原稿を含めたプロライフの論者の論稿の他、クオモのこの演説原稿も掲載されている。

さらに、イントロダクションには、大統領選の投票日（1984 年 11 月 6 日）直後の 1984 年 11 月 19 日付の本誌を賞賛するレーガン大統領の手紙も掲載されている（McFadden 1984:8）。

(35) A Diversity of Opinions Regarding Abortion Exists Among Committed Catholics. *New York Times*. October 7. 1984.

署名者 96 名の内、聖職者と修道者と神学者は 75 名、博士号取得者は 50 名いる。その中には、ノートルダム大学教授で著名なフェミニスト神学者であるエリザベス・シュスラー・フィオレンツァ Elizabeth Schüssler Fiorenza をはじめとして、同大学の関係者の名前も複数ある。

(36) Hunt & Kissling（1993:16-23）

(37) The Cardinal of Choice; Thrown out of the convent for asking too many questions, Frances Kissling Has Become One of the Most Controversial Leaders in Catholicism Today. *Washington Post*. August 24. 1986.

(38) Karrer（2016:124）

モイニハンは、ニューヨーク州選出の上院議員であり、2000 年に政界を引退した。その後任で当選したのは、同じく民主党で、後に女性初の「大統領」候補となるヒラリー・ロダム・クリントン Hillary Rodham Clinton である。

(39) Woodward（2004:11）

(40) Woodward（2004:11-12）

(41) Woodward（2004:12）

(42) Woodward（2004:12）

(43) Woodward（2004:12）

(44) Woodward（2004:12-13）

(45) Cuomo（2004:13）

(46) Cuomo（2004:13-14）

(47) Cuomo（2004:14）

教皇不可謬説において、教皇の不可謬権をもって宣言されたのは、聖母の無原罪の宿り、聖母の被昇天の二つとするのが一般的である。

(48) Cuomo（2004:14）

(49) Cuomo（2004:14）

(50) Cuomo（2004:14-15）

(51) Cuomo（2004:14-15）

(52) Cuomo（2004:15）

(53) Cuomo（2004:15）

(54) Cuomo（2004:15）強調原文

(55) Cuomo（1993:15）強調原文

(56) 現在でも、2021 年 6 月 18 日には、バイデンが「私的な事柄であり、私はそのようなことが起こるとは考えていない」と発言していた。これは、（本文中で登場した全米カトリック司教協議会とその外郭団体の合衆国カトリック協議会が統合されてできた）合衆国カトリック司教協議会 U.S. Conference of Catholic Bishops がカトリックの政治家の聖体拝領を拒否する条件を記した文書を作成することを会議で決したことに対するものである。この文書によって、バイデンは、プロチョイスの立場をとるために、聖体拝領を拒否されるのではないかと話題になっていた。この発言から、少なくとも、政治家としての公的な立場といちカトリック信徒としての私的な立場は区別して考えるべきだと、バイデンも考えていることが伺える。

これを報じた『ニューヨーク・タイムズ』紙は他に、事前に反対の意志を示していた教皇・教皇庁と米国のカトリックの対立を明白にすること、聖体拝領するかどうかを決める権限は司教協議会ではなくそれぞれの教区を担当する司教であること、米国のカトリック信徒の約 56%が合法的中絶を支持しているがミサに定期的に参加している人に限ると 3 分の 2 が支持していないことなども報じている（Targeting Biden, Catholics Bishops Advance Controversial Communion Plan. *New York Times*. June 18. 2021）。

14 日には、すでに「中絶を巡ってバイデンへの聖体拝領を否決しないよう、ヴァチカンは合衆国の司教たちに警告」というタイトルの記事で報じられるなど、関心を集めていた。この記事では、他にホワイトハウスのベイツ報道官が「大統領は敬虔な信仰心のある人」だと述べたこと、宗教の国政への介入になると多くの人が信じていることなども伝えられている（Vatican Warns U.S. Bishops: Don't Deny Biden Communion Over Abortion. *New York Times*. June 14. 2021）。

本件は、最終的に、同年 11 月 17 日に、中絶などの具体的な事例を盛り込まないガイダンスの文書が承認された。『ニューヨーク・タイムズ』紙は、これを報じる際に、バイデンが、10 月の教皇との会合の後に、教皇から「善良なカトリック」と呼ばれ、ローマで聖体拝領を受けたことなども、併せて報じている（Catholic Bishops avoid Confrontation with Biden over Communion. *New York Times*. Nov. 17. 2021）。

(57) Casanova (1994: 197-200=412-416）

カサノヴァは、米国の歴史上の経緯を追って、米国のカトリック信徒が、常に、国民的契約に受け入れられるために、米国の市民宗教への忠誠を示さなければならず（167-168=351-352）、ジョン・F・ケネディ John F. Kennedy 大統領が私的宗教と公的な世俗領域を分離するという姿勢を示していた（174-175=366）ことを論じた上で、クオモの演説と司教たちの批判を提示する。カサノヴァは、この演説を含む米国の事例から導き出されることとして「近代の公共領域に入ってしまったために生じる意図しない結果を免れるには、教会は、再び私的でないセクト的な避難所に退き、近代世界における公共宗教であるという主張を放棄するしかない」と述べている（207=431）。

(58) ガットマンとトンプソンは、熟議民主主義について論じる際に、ジョン・ロックの寛容論からの検討として、クオモの演説を取り上げた。その中で、彼らは、クオモの演説について好意的に取り上げ、「道徳的地盤の上で政策を判断することにおいて、我々が反対する立場の排除を最小限にする理論的根拠を我々は探索すべきであるという他の立場の道徳的地位を認定する」寛容における寛大の一形態の例であるとする（Gutmann & Thompson 1990:81）。
(59) 加藤・檜垣（2012:27）
(60) 加藤（2007:14）
(61) この時、クリントンは、クオモのノートルダム大学でのまさにこの演説を読んだ上で、自身の寛容と世俗的な見解を述べる場所にノートルダム大学を選んだという（The 1992 Campaign: Democrats; Clinton says foes sow Intolerance. *New York Times*. Sept 12. 1992）。
(62) At Notre Dame, Obama callas for Civil Tone in Abortion Debate. *New York Times*. May 17. 2009

※ 本稿おいて、強調はゴシック体に太字で表示した。

※ マリオ・クオモのノートルダム大学での演説原稿は、複数の出版物に掲載されているが、本稿では、クオモ本人による強調の標記がされていることから、クオモの演説集 Mario Cuomo. 1993. *More Than Words – The Speeches of Mario Cuomo*. St. Martin's Press に掲載されているものを参照した。

参照文献

加藤 尚武・檜垣 立哉 2012「日本の生命倫理を総括する（往復書簡）――加藤尚武⇄檜垣立哉」檜垣編『生命と倫理の原理論――バイオサイエンスの時代における人間の未来』pp.16-60、大阪大学出版会。

Casanova, José. 1994. *Public Religions in the Modern World*. University of Chicago Press（カサノヴァ、ホセ 2021『近代世界の公共宗教』津城 寛文訳、筑摩書房）

Cuomo, Mario. 1993. Religious Belief and Public Morality – A Catholic Governor's Perspective. *More Than Words – The Speeches of Mario Cuomo*. pp.32-51. St. Martin's Press

――――. 2004. Persuade or Coerce? – A response to Kenneth Woodward. *Commonweal*. Sep:13-15.

Gutmann, Amy and Dennis Thompson. 1990. Moral Conflict and Political Consensus. *Ethics*. 101(1):64-88.

Hunt, Mary E. and Frances Kissling. 1993. The New York Times Ad. *Conscience*. 14(1):16-23.

Karrer, Robert N. 2016. Abortion Politics – The Context of the Cuomo-O'Connor Debate, 1980-1984. *U.S. Catholic Historian*. 34(1):103-124.

McFadden, James P. 1985. Introduction. *Human Life Review.* 11 (Winter/Spring):2-8.

Novak, Michel. 1984. Archbishop, Governor, & Veep. *National Review*. September 21:4.

O'Connor, John J. 1985. Human Lives, Human Rights. *Human Life Review.* 11 (Winter/Spring):41-65.

Regan, Ronald 1984. *Abortion and the Conscience of the Nation*. Human Life Foundation（レーガン、ロナルド 1984『私は許さない——中絶と国民の良心』中山 立訳、データハウス）

Woodward, Kenneth L. 2004. Catholics, Politics & Abortion; My argument with Mario Cuomo. *Commonweal.* Sep:11-13.